日本医史学雑誌第五十三巻第二号　平成十八年十月二十六日受付
平成十九年　六月二十日発行　平成十九年四月　八日受理

# 本邦牛痘種痘法の鼻祖中川五郎次研究の歩み（上）
## ――（1）江戸時代から（5）昭和時代後期まで――

松木明知
弘前大学医学部麻酔科

〔要旨〕中川五郎次の本格的研究は、一八八五年小貫庸徳が松前地方で実地調査して詳細な報告を行ったことに始まる。以来中川の事績が徐々に知られるようになった。函館市の小児科医阿部龍夫は一九四三年に「中川五郎治と種痘伝来」を上梓したが、中川研究において大きな進歩であった。

一九六〇年代初め、順天堂大学の村山七郎は中川がシベリアから将来したロシア語種痘書を特定して翻訳した。この頃著者（松木）は馬場貞由がこの種痘書を一八二〇年に翻訳した「遁花秘訣」の各種写本の書誌学的研究を行ない、同時に中川家、小針屋家の墓碑などを実地に調査して、彼の埋葬地を特定した。最近の知見として著者は中川に関するすべての史料を網羅した「北海道医事文化料集成」全三巻を発行して研究者の便を図った。

過去一二〇年間、中川に関する多くの論考が発表されたが、それらの殆どで誤った文献が引用されて重大な誤りが踏襲されている。

キーワード――中川五郎次　小貫庸徳　村山七郎　遁花秘訣　北海道医事文化史料集成

日本の医学史について一家言を持つ吉村昭は本邦牛痘種痘法の鼻祖中川五郎次に関して、「日本の医学史は、かれを除いては成立せず、かれの存在はさらに多くの人々に知られて欲しいと思う」[1]と記したが、中川に関する過去百数十年にわたる研究において、明治中期、昭和十年代、昭和四十年代、平成年代前半の計四回大きな進歩があった。しかしいずれの進歩においても先行研究が必ずしも適切に評価され採用されるという状況にはなかったことは残念である。これに加えてこれらの研究の過半で重大な誤りが次から次へと踏襲されたことは五郎次研究において大変惜しむべきことであった。

以下年代を追って重要な研究を解説してその研究の持つ意義に言及し、誤謬を指摘して訂正する。なお中川の名前について従来は「五郎治」が一般的であったが、著者[2]の最近の研究によって「五郎次」が正しいと判明した。このため本稿では「中川五郎次」の姓名を採用する。

## 1　江戸時代（一八六八年八月以前）

中川五郎次が東シベリアでの五年半にわたる抑留生活を終えて帰国したのは一八一二年（文化九）であったが、以来幕末（一八六八年八月）に至るまで中川五郎次の事績が本格的に研究されることはなかった。

帰国直後は異国からの送還民の故に幕府による五郎次の厳重な取調べが行われたが、尋問は五郎次がロシア船に拉致された経緯、帰国の背景、シベリアにおける生活振り、良左衛門という偽名を用いた理由などに主眼が置かれていた。そして幕府側の質問はロシア人女性との性交渉の問題にまで及んだ。ロシア正教入信の問題が関係すると幕府側が考えたからに違いない。しかし牛痘種痘の詳細について幕府側が尋ねたという形跡はなく、五郎次が将来したロシア語の種痘書二冊に関してもそれらの入手先を入念に追求したという記録は残されていない。以上は五郎次の事績の調査というよりもむしろ純然たる取調べであった。

一方、極めて少数ではあるが、知識人が五郎次にシベリアでの生活を尋ねて記した事実が認められる。しかしその知識人の殆どは幕府や松前藩の関係者に限定されていた。松前藩の寺社奉行山田三川の「有北紀聞」[3]がその代表的史料である。五郎次は異国からの送還民であったから、その身分が松前藩預かりとなり、下級藩士に取り立てられても、シベリアでの見聞を一般人に詳細に話すことを禁じられていたのであろう。例え一般人が五郎次から断片的にシベリアでの経験談を聞いたとしても、それを系統的に纏めて記録に残すということはしなかったであろう。五郎次の種痘法についても、識者がそれを正確に伝えようと試みた形跡は殆ど認められない。また五郎次が正確な記録として遺そうとしなかったようである。

広島の三宅春齢は一八五三年（嘉永六）に「補撼録」を著したが、その附録に南総の医師井上宗端の「魯西亜伝牛痘種法之記」[4]が収載されている。五郎次の種痘法などに言及した文の末尾に「右ハ五郎治魯西亜人より傳る所の説の由、今茲嘉永三年庚戌ノ歳六月十四日五郎治よ里所レ聞のまゝを記す」とある。五郎次は一八四八年（嘉永元）の九月に没しているから、一八五〇年（嘉永三）六月の時点で井上宗端に「語る」ことは出来なかった筈である。したがって宗端は五郎次が誰かに語ったことを間接的に聞いて記録したのである。この記録は重要ではあるけれども、五郎次から直接聞き取ったことでないため全面的な信頼を置くことは出来ない。右に引用した「魯西亜伝牛痘種法之記」の文の前にロシア国の皇帝が自らロンドンに赴いて過大な謝礼を払って種痘法の伝授を受けた旨を記している。この記述は山田三川の「有北紀聞」[3]の記載と極めて近似している。このことから井上宗端は何らかの形で山田から情報を得た可能性があると思われる。

正確な年代は知られないが、松本胤親も五郎次について記録を遺したという。しかし一八九四年（明治二七）に平出鏗二郎[5]が引用した松本の「五郎次話」は現在所在不明であり、その内容を詳細に検討することが不可能である。

このような状況を考慮する時、江戸時代において中川五郎次の事績が研究されたと結論することは出来ない。

## 2　明治時代（一八六八年九月～一九一一年六月）

明治時代に入って五郎次の事績が注目を集めたのは中期に入ってからである。すなわち一八八二年（明治一五）青森県に在住していた菊地武文は「文政年間ノ種痘家」[6]と題する短報を東京医事新誌に掲載した。菊地はこの雑誌二一六号に掲載された高田耕春の「種痘三祖の記念碑を東京に建設せんことを議す」および二二〇号に掲載された郭　嘉四郎の「日本種痘家ノ祖トハ誰ソ」の論文に触発されて、この一文を草した。この中で菊地はロシアで種痘術を習得した中川五郎次がすでに一八二四年（文政七）に種痘を実施したことを述べている。五郎次が「文政七年」に種痘を行ったことに言及した最初の論考である。菊地自身、五郎次から種痘を受けた青森県在住の二人の人物について調査して報告した。したがって五郎次から種痘を受けたこの二名は後述する小貫庸徳[7]の松前地方での被接種者の実地調査から漏れていた。この意味において本論文は大変貴重である。

接種を受けたのは七〇歳の女性と四〇歳の男性であった。女性は上膊、男性は上膊と内股に接種痕があったというが、部位の左右についての記載はなく不明である。この二名は年齢を考慮すれば後述する小貫の調査で明らかにされた被接種者七名以外の人物であることは間違いない。

しかし菊地の記述に誤りも多いので注意を要する。例えば中川が暴風のためロシアに漂流したとあるが、ロシア船に拉致されたのであって、暴風のために船が難破して漂流したのではない。「帰朝ノ日ニ臨ミ痘苗ヲ携ヘ来リテ」とあるが、五郎次は痘苗を持ち帰らなかった。松前藩医の桜井小膳が五郎次から種痘法の伝授を受け、藩内で広く種痘を実施したことが藩公の耳に達して、「中川氏ハ小膳君ノ推挙ニ依リ該藩士ノ末ニ列スルノ栄ヲ得」とあるが、

五郎次の身分は最初に種痘実施を行ったとされる一八二四年（文政七）以前にすでに下級藩士に取り立てられている。桜井が五郎次を藩士に推挙したという客観的証拠はなく、また桜井が五郎次から種痘法の伝授を受けた正確な時期も知られていない。五郎次が「七十有餘歳ニシテ没ス」とあるのも間違いで、五郎次は一八四八年（嘉永元）八〇歳で没した。この菊地の論文は著者の松木が一九八三年（昭和五八）に発掘するまで一般に知られていなかった。なお菊地は医師であったと思われるが、詳細は不明である。

一八八五年（明治一八）二月函館県衛生課の小貫庸徳は県の命令で種痘施行のことに関連して松前地方を巡回調査した際、中川五郎次の種痘実施について耳にし、五郎次から種痘を受けた数名の者に会い、さらに松前郡書記小西彌藏から五郎次の手記を借覧してその内容に感銘を覚えた。小貫は「北海道種痘ノ濫觴」[7]と題して短報を書いて函館新聞に投稿し、四月二四日（一二一三号）に掲載された。中川五郎次の事績に本格的に言及した最初の論考である。その要点は次のようなものであった。

五郎次（生国不詳とある）は文化四年（一八〇七）にロシアに拉致され、文化九年（一八一二）わが国に送還され、松前、江戸で取り調べを受けた。後に松前藩の卒に取り立てられた。孫の中川栄吉は松前郡福山博知石町五十余番地に住み、弘化二年（一八四五）生まれの四五歳である。松前郡書記小西彌藏の所有していた五郎次自筆と思われる手記によれば、五郎次はヤクーツク、オホーツクで種痘法を学んだという。そして小貫は五郎次から種痘を受けた人々に実際に直接面談して確認した。次の七名であった。

福山　士族　村田小藤太　六三歳
士族　小山安之　五二歳

平民　坂口善右エ門　六三歳
江良町　平民　畑谷宇兵衛　七〇歳
（宇畑谷兵衛と誤植―松木注）
檜山郡小砂子村
士族　小山八百里　五九歳
江差　平民（元士族）　尾山徹三　五〇歳
函館大町　商　田中正右エ門　母　イク　七二歳

最高齢者の田中イクは一一歳の時に種痘を受けたという。これから逆算してイクは文政七年（一八二四）に種痘を受けたことになる。

小貫は村田小藤太の言として、五郎次の弟子函館の白鳥雄造（蔵が正しい―松木注）を挙げ、秋田地方で種痘を普及したことを述べている。さらに五郎次の種痘は正確には不明であるとしながら、牛痘ではないようであると述べている点は注目すべきであろう。いずれにせよ、この小貫の記事は五郎次の事績に言及した最も初期の報告であり、しかも被接種者七名の氏名、年齢と住所を面談調査して伝えている点で極めて重要である。小貫の記事の末尾に次のように記されている。

余、本年二月、種痘施行ノ事ニ付、県令ノ命ヲ奉シ、松前方面巡回ノ時ニ当リテ此奇聞ヲ得ル。奇ト謂ハサル可ンヤ。故ニ此事ヲ開申スルヤ、県令モ亦大ニ之ヲ嘉賞シテ措カス。且其事既往ニ属スト雖モ、亦是地方ノ美

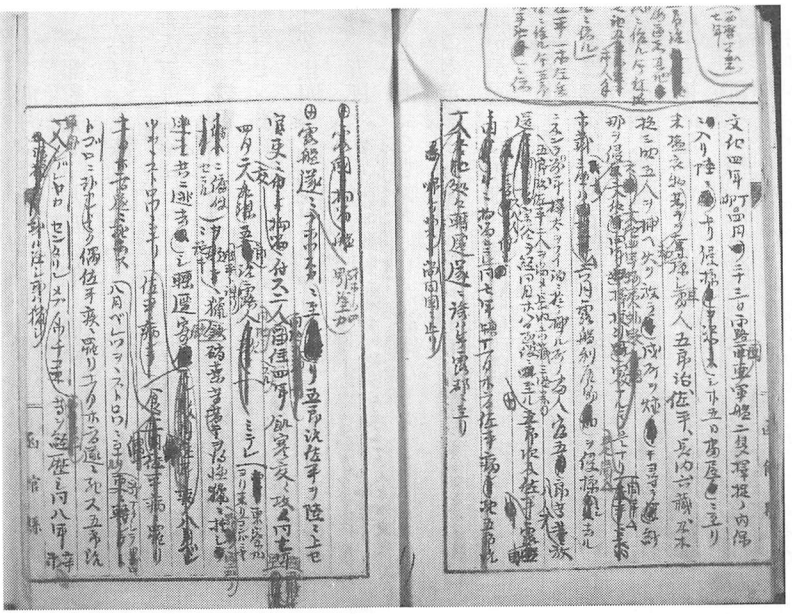

写真1　村尾元長「北海道種痘ノ濫觴並擇捉島番人五郎治事蹟」自筆稿本
（北海道古今諸調参考雑書所収、函館市中央図書館蔵）

事、管内ノ佳話久シテ後、湮滅ニ帰セン事ヲ恐レ、庶務課長ニ命ジ其事ヲ調査セシメ、不日将ニ内務省ニ報告セントス。余モ亦佳話ノ弘ク世ニ傳ルヲ喜ヒ、此ニ之ヲ略述スル。如此云爾。（句読点―松木）

小貫の報告は更なる調査の手が加えられて内務省に報告されたことがこれによって知られる。報告は一八八七年（明治二〇）六月二八日の官報一一九八号「衛生欄」に掲載された「北海道種痘ノ濫觴」がそれである。一方、函館県は小貫の調査を含めて管内の衛生状態を調査した結果を「函館県衛生課第一回年報」として纏めたが、[9]五郎次の事績に関しては第二章第七款の種痘の項に「附記、北海道種痘ノ濫觴　並　擇捉島番人五郎治事績」として収録された。この年報の発行日は「明治一六年一一月」となっているが、記事の内容から考えて小貫の調査を承けたものであることは間違いない。函館県が置かれたのは一八八二年（明治一五）二月であり、廃止されて

北海道になったのは一八八六年（明治一九）一月であったから、年報が発行された実際の期日は一八八五年（明治一八）四月以降一八八六年（明治一九）一月以前であろう。

阿部龍夫は一九四三年（昭和一八）に「中川五郎治と種痘伝来」[10]を出版した際、村尾元長の「松前産物大概観」[11]の附録「北海道古今諸調参考雑書」の末尾に「種痘濫觴」を見出したが、正確な題は「北海道種痘ノ濫觴並擇捉島番人五郎治事績」であった。**写真1**に示したように推敲に推敲を重ねたこの年報の草稿は村尾の執筆に対する執念を物語るが、これによって小貫の新聞記事の末尾にある「庶務課長ニ命ジ、其事ヲ調査セシメ、不日将ニ内務省ニ報告セントス。」とある再調査を担当したのが、函館県に奉職していた村尾であったことが明らかである。その内容は文化四年（一八〇七）の拉致、シベリアでの生活、文化九年（一八一二）の帰国、シベリアにおける種痘術の習得、五郎次から種痘を受けた七名の住所、氏名、年齢、痘苗についての医師熊坂秀斎の証言、五郎次の生涯など北海道の旧記をも参考にした詳細なものであった。

この年報の記事と官報の記事を比較すると、重複する部分の文章は殆ど同一であり、また文章が同一でなくても語句が同一である。全体として見ると官報の記事は年報記事の前半の部分であることは明白である。しかし小貫庸徳の新聞記事には披見されない熊坂秀斎の証言が付け加えられていることは注目すべきである。

不思議なことに小貫は「五郎次」としたが、村尾は「五郎治」と訂正している。もっとも村尾は「治或ハ次ニ作ル　今本人書記ニヨル」と記しているから村尾も松前郡書記小西彌藏の所有していた五郎次自筆と推察される手記を直接閲覧したに相違ない。この手記はいわゆる「五郎治申上荒増（御申上荒増、御申上荒増扣）」であろうが、現在五郎次自筆の原本の所在は知られていない。

村尾の記述は五郎次の事績の大約を叙しているが、五郎次から種痘を受けた田中正右衛門の母イクの年齢を「七十一

年」と一歳少なく誤って記している。満年齢ならば正しいが、当時はすべて数え年であった。注意しなければならない。

村尾は一八九六年（明治二九）「北海道史談（全）」[12]（訂正版）を出版した際、第一二章「種痘術」で五郎次について簡略に記した。「天然痘ノ種子を取り牛に施し其の痘苗を採りて諸人に種痘せしむ」と五郎次の方法が牛痘ではなかったとしているが、原史料を何も掲げていない。村尾が「北海道史談（全）」[12]（訂正版）を上梓した二年前の一八九四年（明治二七）平出鏗二郎は「種痘術の創意」[5]を「史学雑誌」に二回に分けて発表した。第一回では本邦と中東の天然痘の疫史、治療法を述べ、第二回では中国における人痘法の歴史、人痘法のトルコから西欧への西漸の歴史に及んでいる。その末尾に松本胤親の「五郎次話」を引用してロシアに六年間滞在した五郎次が種痘術を学んでわが国に伝えたことは信じ難いが事実である旨を述べて、ジェンナーの種痘法の実際をも記述している。重要なことは五郎次がシベリアから種痘書二冊を持ち帰ったことに触れ、一冊はイルクーツクからヤクーツクへの途中で一商人から、もう一冊はオホーツクの医師から貰ったとしている。最後に五郎次は痘苗を大野村の牛に天然痘の種子を植えて作ったことを医師熊坂秀斎の言を引用して述べ、一八八七年（明治二〇）当時、五郎次から種痘を受けた者七名が存命していることを官報によって示した。平出が官報[8]に掲載された記事を参考に記述したことは間違いないが、もう一つの史料、松本胤親の「五郎次話」は現在その所在は全く不明である。同名の「五郎次話」には平出が引用した文章は認められない。松本胤親の文章にも重大な誤りがある。それは五郎次が将来したロシア語の種痘書はジェンナーの牛痘種痘書のロシア語訳であるとしている点である。両者は全く異なる。注意する必要がある。結論的には平出の論文に披見される五郎次に関する記述は殆どを官報に依拠しており、観るべきものはない。なお平出の論文の末尾に一八八七年（明治二〇）六月三〇日の官報にも五郎次に関する記事があるとしているが、衛生欄にはそのような記事は披見されない。

一八九四年（明治二七）から翌一八九五年（明治二八）にかけて医学史研究者の富士川游[13,11]は種痘の歴史について短文を発表した。五郎次がロシアに拉致され、かの地で種痘術を習得したこと、帰国時種痘書一冊を持ち帰り、文政七年、天保六年、天保一三年の蝦夷地における天然痘流行時に種痘を行ったことを述べているが、富士川が五郎次の拉致の時期を一八〇八年（文化五）と誤っていることから推察すれば、富士川は第一次史料を見たのではなく、二次史料を利用したことが強く示唆される。したがって五郎次を医学界に広く知らしめた功績はあるが、論考自体に新しい知見はない。

明治後期において西宮の論考以外は新知見がない。秋田県衛生課職員西宮藤毅[15]の文章は一九〇八年（明治四一）の秋田魁新報に掲載された。著者（松木）が一九六八年（昭和四三）に発掘した史料である。この史料が知られていなかったため、五郎次の種痘法の秋田に於ける普及について、以下に述べるような昭和十年代に阿部、加藤、深味の間で無意味と思われる論争が数年間続いた。西宮は五郎次の弟子白鳥雄蔵について次のような貴重な情報を我々に与えた。すなわち白鳥雄蔵は医学研究のため秋田に来て藩医斉藤養達の門に入った。雄蔵は養達の門人たちに種痘法を伝授し実地に応用した。その効果が藩公の耳にも達して秋田藩では雄蔵のほか、藩医の元達、禎斎、玄長の四人に命じて広く種痘を実施せしめた。これは一八四三、四年（天保一四、五）頃の話である。種痘後、両腕の接種部位以外に全身に数百点発痘したこともあったという。雄蔵の種痘法が牛痘か、または人痘かは定かではないが、汎発性牛痘疹を考慮に入れると、一概に牛痘を否定することは出来ない。雄蔵は一八四三年（天保一四）か一八四四年（弘化元）に秋田を去っている。秋田藩では千人中一、二の死亡者があってもこの方法の利点を認めたので医学館に命じて普及させた。西宮は以上の情報を伝えたが、白鳥雄蔵が斉藤養達の弟子であったことは雄蔵の種痘法を考える上で極めて重要である。

以上明治期の研究を概観してきたが、中川五郎次の本格的研究は明治中期の小貫庸徳[7]、村尾元長[9]の調査報告に始まるといっても過言ではないし、一九四三年（昭和一八）に阿部龍夫が「中川五郎治と種痘伝来[10]」を発表するまで最も詳しい研究であった。前二者の報告は阿部龍夫の著書[10]や松木明知編の「北海道医事文化集成（続）[3]」に収載されている。

## 3　大正時代（一九一二年七月～一九二六年一一月）

一九一八年（大正七）八月一五日、北海道は開道五〇年記念式典を行った。一八六九年（明治二）八月一五日にそれまでの「蝦夷地」が「北海道」と改められ、開拓使が置かれてから数え年で五〇周年であった。北海道は開拓に尽瘁した人物一三〇名を開拓功労者として顕彰したが、一八六九年（明治二）以前の開拓功労者三〇名の中に中川五郎次も含まれていた。五郎次は「故中川五郎治」として北海道庁長官俵　孫一から賞状と銀杯一個が遺族に贈られた。功労者の略歴は「北海道拓殖功労者旌彰録[16]」として一九一九年（大正八）に北海道庁から発行された。この五郎次の略歴は小貫庸徳[7]の新聞記事や村尾元長[9]による官報の記述に拠ったものである。式典一月前の七月六日に道庁から福山町長金田弥太郎に五郎次の子孫と五郎次の墓碑とその形状について問い合わせがあった。金田町長は早速調査して回答し、四世の孫中川栄吉は函館市若松町二番地に居住しており、墓碑は法源寺にあったが先年改葬されて函館に移され、福山（現松前町）には現存しないと回答した。五郎次の墓がなかったのは確かであるが、五郎次の両親の墓碑が一基放置された事実は無視された。この金田町長の回答は中川家の墓が「すべて」函館の高龍寺に移転されたと言う誤解を生み出すことになった。前記「北海道拓殖功労者旌彰録[16]」の末尾に「近年五郎次の墓を福山法源寺より函館区臺町高龍寺に改葬したりといふ」とあるのがそれである。なお「北海道拓殖功労者旌彰録[16]」の抄録版が一九二一年（大正一〇）に高橋理一郎[17]の編集で出版された。

開道五〇周年を記念して、北海道は「北海道史」の執筆を河野常吉に委嘱した。開道五〇年式典が挙行された一九一八年（大正七）に出版されたが、その第六編「後幕領時代」の第二二章「衛生」[18]に「種痘」の項目があり、極めて簡単に五郎次が紹介されている。河野は同時に「北海道史」の一部として「北海道人名字彙」[19]を完成させたが、印刷されるに至らず、出版されたのは一九七九年（昭和五四）であった。「中川五郎治」の記述には小貫、[7]村尾[9]の記載以上の知見はないが、没年を一八五六年（安政三）と誤っている。

一九二四年（大正一三）二月一一日、五郎次に従五位が追贈された。興味あることに贈位の沙汰書には「五郎治」でなく「故中川五郎次」とあった。この時政府の要請を請けて道庁は中川家に五郎次の肖像の提供を強く慫慂した。困惑した中川家は仕方なく五郎次の孫娘「よし」の婿栄吉（初代）をモデルにして描いた肖像画を当局に提出した。この肖像画を後に阿部龍夫が誤ってその著書「中川五郎治と種痘伝来」[16]に採用したため、後々まで大きな禍根と混乱を残すことになった。せめて息子や孫をモデルにしたのであればまだしも、孫娘の婿と言う赤の他人がモデルであるから、この肖像画は全くの「にせもの」といっても良い。この「にせもの」を五郎次の肖像として掲げる著書や論文が余りにも多い。このような論考は引用に慎重でなければならない。

翌年一九二五年（大正一四）に二編の論文が現れた。一つは河野常吉の「本邦種痘の鼻祖　中川五郎次の事蹟」[20]である。先に述べた河野による五郎次について記述を「御申上荒増」を参考に一層詳細に述べた。冒頭において河野は「固（も）と是、擇捉漁場一番人なり。雄大の抱負、高邁の識見を欽くと雖も、捕へられて異境に在ること六年、其間屈せず、撓まず、矯々たる日本魂は実に士人と雖も遠く及ばざる者あり。殊に始て種痘の法を傳へて、之を実行したるに至りては其功績の偉なる、誠に稀有の事となす。吾之が為に其傳を作らざるを得ず。」（句読点、読み　松木注）と記している。

五郎次の種痘法を伝えた功績ばかりでなく、拉致されて辛酸をなめた生活を強いられながらも節を曲げなかったその国士的態度を評価した最初の論文である。この意味でこの論考は評価されるべきであろうが、小貫[7]、村尾[9]の記述以外の新知見は見られない。五郎次に種痘を受けた田中イクを「今の函館の豪商田中庄衛門の母」としているが、正しくは「田中正右衛門の母」である。

もう一つは同じくこの年に発表された関場[21]不二彦の論文である。関場は自分が発行している「北海医報」に前述した河野[20]常吉の論文を収載し、その次号に一八九七年（明治三〇）に執筆して暖めていた旧稿を掲載した。内容の一部は一八九六年（明治二九）友人の佐竹達次郎が函館、福山地方で実地に調査した事項と高畑宣一の調査結果を含んでいる。

「其一」において「御申上荒増」を参考に五郎次の事績に触れているが、注目すべきは井上宗端の「魯西亜傳牛痘種法之記」[4]を紹介し、五郎次の種痘法の実際について議論していることである。最後に種痘を受けた人物に及んでいる。佐竹が調査したとあるが、小貫[7]の報告を見たものであろう。しかし高畑宣一は小貫の調査で明らかにされた七人以外に、元家老職新井田等夫人（天保初年種痘）、元町奉行飛内策馬夫人（種痘年月不詳）の二人を発掘したことは注目すべきである。しかしこの事実を後続の研究者が無視したことは極めて残念である。

「其二」では平出鏗二郎の「種痘術の創意」[5]中に引用された松本胤親の「五郎次話」を紹介しているが、それ以上の新知見はない。「其三」は蝦夷地における痘瘡の疫史と桑田立斎などによる蝦夷地における種痘を述べている。

総じて五郎次の出身地、生没年、シベリアでの生活、ロシアから将来した種痘書についてほぼ正確な記述がなされているが、二人の新しい被接種者と「魯西亜傳牛痘種法之記」に言及している以外は小貫[7]、村尾[9]の論文を凌駕するものではない。五郎次が将来したロシア語の種痘書について「此の「オスペンネエ、ケニガ」とは「オスペイゲ

ネ、クニガ」の訛にして理科書と訳すべきものならん」とあるが、全く誤った推察である。なお関場は一九三三年（昭和八）に全く同文を（「蝦夷往来」一〇号に再掲載したが、論文題名を「蝦夷地の種痘は本邦に先んず・中川五郎治」と改めた。[22]

以上大正期の研究を概説した。この期に関場不二彦は井上宗端の「魯西亜傳牛痘種法之記」を発掘し、種痘の被接種者二名を発見して研究は一歩進捗したが、一方贈位の問題が絡んで偽物の肖像画が作られ、それが流布して後々まで混乱する原因となった。[1]

## 4　昭和時代前期（一九二六年一二月～一九四五年七月）

一九三四年（昭和九）青森県下北郡大畑町の郷土史家笹沢魯羊は「大畑町誌」を発行したが、同じ下北郡出身者の五郎次にも言及した。[23] 記述の過半は「御申上荒増」に拠ったもので新知見に乏しいが、五郎次の帰国時に、川内村検断は五郎次が同所百姓佐助の倅に相違ない旨の一札を出したと言う。このことは大変重要な記事である。五郎次が両親と共に松前に移住したとする論文もあるが、五郎次が拉致された当時、両親は川内村におり、松前に移住した事実はなかった証明である。

一九三五年（昭和一〇）市立函館図書館長岡田健蔵は「函館市功労者小伝」を執筆した。[21] 当然「贈従五位　中川五郎治」にも触れているが、五郎次の肖像を掲げていること、五郎次の墓碑が高龍寺にあるとしていること、没年は一八五六年（安政三）であるなど三つの重大な誤りを犯している。この年市立函館病院小児科の阿部龍夫は「中川五郎治種痘伝来の事」と題する文章を書いた。[25]「市立函館病院要覧」の「沿革」を担当した阿部が附録として掲載したもので、五郎次について阿部が執筆した最初の論考であった。五郎次がロシアから種痘書を将来したこと、文

政七年、天保六、一二年に種痘を行ったこと、大野村の牛を使って痘苗を作ったこと、函館の田中正右衛門の母イクが一一歳の時種痘を受けたこと、五郎次の種痘法は白鳥雄蔵、高木啓策、桜井小膳などによって秋田地方に普及したことが述べられている。この内容は小貫[7]、村尾[9]らの論文に加えて関場不二彦の「中川五郎治（治一に次に作る）が種痘事蹟　附載　蝦夷地に於ける種痘概略（序文二章）」[21]を参考にしていることは、阿部が五郎次の将来した種痘書について「尚オスペンネエ、ケニガはオスペイゲネ、クニガの訛で理科書と訳すべきもの、由である。」と関場の誤った記述をそのまま引用踏襲していることによって明白である。

小児科医として阿部龍夫は五郎治の種痘法の南漸に深い関心を寄せ、一九三六年（昭和一一）に「秋田最初の種痘」[26]を秋田魁新報に発表した。この論考の中で注目すべきは五郎次の種痘法は白鳥雄蔵に受け継がれ、雄蔵は秋田地方でそれを普及し、一八四三年（天保一四）大館の肝煎り石田宗右衛門の長女（六歳）が「貞庵」なる医師から種痘を受けたことを指摘した。そして阿部はこの「貞庵」がだれであろうかと疑問を提出した。以前から秋田の種痘史に興味を持っていた秋田の郷土史家加藤蓼州[27,28]は秋田における白鳥雄蔵の事績は不明ながらも、大森誠達は若年時に「田原貞庵」と称していたから、大館で石田宗右衛門の長女に種痘を行ったのはこの「田原貞庵」ではないだろうかとした。阿部は秋田魁新報に掲載した記事の内容をこの年の「医界展望」[29]八〇号に掲載したが、二ヶ月後の同誌八七号に加藤[30]も大館で肝煎り石田宗右衛門の娘に種痘したのは田原貞庵の可能性が高いと自説を展開した。さらにこの年秋田の深見三郎は「秋田医事衛生誌」に「秋田藩牛種痘の来歴」[31]と題する論文を発表した。深見は祖父春三の手記を発見したが、その中に秋田の種痘の歴史が言及されていると言う。文政年中、函館の白鳥雄蔵が秋田に来て、斉藤養達の門に入り医を学ぶ傍ら種痘術を仲間に伝授した。養達もその効果を認め藩としても広く普及するに至ったが、それは天保一二～四年の三年間のことであったと言う。実はこの内容は一九〇八年（明治四一）に

西宮[15]が秋田魁新報に発表した記事を深見春三が書き留めていたものであった。春三の記録が不十分なものであったため、今度は深見三郎と加藤との論争に発展した。

この年長崎大学皮膚科の高橋信吉は「蝦夷痘徽史考[32]」を上梓した。痘瘡や梅毒のアイヌ民族への浸透の歴史を論じているが、第三章は「我国最初の洋式種痘法傳来者擇捉島番人五郎治」と題して五郎次の事績を本書全八五頁の内四一頁を費やして論じている。しかし五郎次についてはその殆どを「御申上荒増」の記述と官報[8]、平出[5]の論文に準拠しているので新知見は一つもない。

一九三七年（昭和一二）阿部は「牛痘接種南漸史考[33]」、加藤は「秋田藩牛痘種痘の来歴に就き深味三郎に問ふ[34]」をそれぞれ発表したが、大館における最初の種痘者の特定については決め手を欠いていた。

北海道庁所蔵文書整理事務を担当した高田不二夫は「捕はれた五郎治[35]」と題して「北海道倶楽部」に四回にわたって連載したが、これは単に「御申上荒増」を現代文に抄訳したものに過ぎなかった。この意味で五郎次研究上価値ある文献とは云えない。この年関西医史学界の重鎮中野操は「日本牛痘濫觴史譚[36]」を発表したが、笠原白翁の書簡によって五郎次についての新知見を付け加えた。その書簡には東北の士人白鳥雄蔵は京都の日野鼎斎と頼山陽の弟子であり、鼎斎の意を受けて五郎次に種痘術の伝授を乞うたが、断られた旨記されているというが、その内容は伝聞が主体であり、必ずしも真を尽くしているとは考えられない。

前年の一九三六年（昭和一一）に「蝦夷痘徽史考[32]」を上梓した高橋信吉は一九三四年（昭和九）八月、市立函館図書館で「遁花秘訣」の写本を閲覧し、さらに一九三七年（昭和一二）にカラフトにおけるアイヌの調査の帰途、東京で安政二年版の「魯西亜牛痘全書」を入手することが出来たのを機縁として再度五郎次の種痘についての論文[37]を一九三七年（昭和一二）に発表した。まず「遁花秘訣」と「魯西亜牛痘全書」中の馬場佐十郎の序文を紹介し、

五郎次がロシア語種痘書を入手した経緯について論じているが、これはそれまでに知られていたことで何ら新しい見解ではない。次に五郎次の種痘方法に関して、福山の医師熊坂秀斎の言、松本胤親の「五郎次話」、「魯西亜牛痘全書」中の方法を比較検討しているが、結論的に五郎次が大野村で人痘膿を牛に植えて痘苗を造ったというのは偽りで、自然発生の牛痘から遇発的に痘漿を得たのではないかとしている。実際の接種は男女を区別せず、また左右を区別せず上膊に二～四箇所植えたのではないかと推察している。このように高橋は種々論じたものの、他の信拠すべき新しい史料を参考にしての議論でないため、蒸し返しの感が拭えない。

一九三八年（昭和一三）大阪の中野　操は日本種痘史についての論文を相次いで発表した。特に五郎次に関して「牛痘日本移入史考」[38]（中）において、笠原白翁の次のような書簡を紹介して、五郎次の狭量を批判している。少し長くなるが、読み下し文にして左に示す。（　）内の読みは松木による。

五郎治の事承り候は、奥州［仙臺と承り候へ共慥ならず］の書生白鳥雄蔵、京師へ遊学中、難症を相煩い、長々不治に付、日野鼎斎に治療相頼み、本復之祝之席にて、興に入り候て、袒（はだぬぎ）候處、両肘に異しき瘢痕これあり候を見咎め、相詰り候處、是は十三歳の時、牛痘を接ぎし候痕也と申す。其牛痘はと尋ね候へば、右五郎治に御坐候。扨（さて）こそ善き事聞きたり。急に帰国候て、其法傳来り候はゞ、金玉を惜まずと相約し、帰郷致させ候處、傳受は致し呉れ候へ共、第一の痘苗は糊口の程に候間、萬金に替えず。此方、老後は必ず相譲り申すべくとの約束耳にて相分れ候處、程なく、右五郎次、急病にてこれあり哉、江川へ溺死仕り、痘苗も行方知れず相成候由。去ながら、蓄痘苗法、其外の法則の要鍵は右雄蔵の耳に残り候也。右五郎次、魯西亜国へ漂流し帰国の砌、彼国の人、五郎次、彼是老年に候間、帰国と共に最早船人の業は出来申す間敷、何か糊口の業をと種々考へ呉候内、本朝には未だ牛痘傳わらず由聞き及び候て、然は迚傳へ呉候由。其蓄苗の法は、以前より彼国如

（いかが）仕り候事にや、又其節、極遠の地渡すべき儀に付、工夫致し候や、其程は分り申さず云々。

右は「笠原白翁」が誰かに宛てた書簡であって、「白鳥雄蔵」が「笠原白翁」に宛てた手紙でないことは一読して直ちに理解されるであろう。書簡の冒頭に「奥州の書生白鳥雄蔵」とあり、しかもその詳しい出身地は「仙台」かどうか確かではないとしている。この記述だけでもこの書簡は「雄蔵」が「白翁」に宛てたものでないことは明白である。白鳥雄蔵や中川五郎次に関する内容を白翁が第三者に知らせた手紙であると解釈すべきであろう。

萬金を積まれても痘苗を分譲しなかったという五郎次は極めて狭量な精神の持ち主であると評した中野のこの論文で、中川五郎次の評価は低いものとなった。日本医学史の中で中川五郎次が低く評価されているのもこのためであろう。しかし雄蔵がその両肘に種痘による異様な瘢痕を有していたというエピソードは京都の医学界の重鎮日野鼎斎とその一門に大きな衝撃を与えたことは否定出来ない。白翁が後に種痘法普及に懸命に尽力したのも、この影響が大きいと思われる。

一方、この書簡は伝聞を報じたものであるが、極めて重要な事項を我々に伝えてくれる。白鳥雄蔵自身が一三歳の時に五郎次から種痘を受けていること、雄蔵は五郎次から痘苗を蓄える方法以外は伝授を受けていること、五郎次が溺死したことなどである。ただし五郎次がロシアに漂流したとあるのは誤聞である。

中野は右の書簡に続いて、五郎次がロシアから将来した種痘書が馬場佐十郎によって翻訳された経緯を詳細に述べており、それまでに発表された見解と異なることはないが、「遁花秘訣」が一八二〇年（文政三）に上梓されたとしているのは明らかな誤りである。

一九四〇年（昭和一五）五郎次研究で大きな進歩が見られた。函館市で教員を務めた神山　茂は定年前に退職

して郷土史研究に専念した。臨床で多忙を極め、実地調査を行うことが困難であった阿部龍夫の要請もあって中川五郎次の事績について調査したと思われる。その成果は「函館の小学生」[39]の一九三～二一六号（昭和一五年三月～一七年二月）に「初めて種痘を将来した五郎治」として発表された。神山がかつて教員であったからこの新聞に掲載されたものであろう。（1）から（9）までは主として「御申上荒増」を解説して五郎次が拉致された経緯とシベリアでの生活、帰国後の生活に言及した。（10）と（11）では五郎次の墓碑について述べ、松前の法源寺に現存する「大安心徹居士」、「徳室恵然信女」の法名が刻まれた墓が五郎治のものであると結論した。なお子孫から聞き取り調査して五郎次が松前の中川家に養子になったことを子孫の方から聞いているが、これは誤った言い伝えであった。（12）から（14）までは五郎次が何時から種痘の開始したのかを述べ、これに関連して最初の被接種者である田中正右衛門の母「いく」について田中家の過去帳を調査して「いく」の年齢から、彼女が一一歳で種痘を受けたとすれば、それは一八二四年（文政七）であり、受けた場所は福山であることを確定した。（14）から（19）では五郎次がどのようにして痘苗を得たか論じているが、諸種の著書、論文を参考にしているが、神山自身は結論を下していない。

一方神山はこれとほぼ同時に五郎次について阿部龍夫の主宰する雑誌「風鐸」に「五郎治」[40]と題して掲載した。一九四〇年（昭和一五）一一月のことであった。「風鐸」に掲載した内容は、「ごろうじ」の表記法、良左衛門の名、帰国後の身分と生活、生と死、子孫、系譜に及んでいるが、特に注目すべきは中川家の過去帳を調査して系譜を作ったことであり、これによって従来五郎次の墓碑とされてきた函館の高龍寺の墓碑は息子市三郎のものであることが明確になった。さらに過去帳中の「大安心徹居士」の法名を有する墓碑を松前の法源寺に求め、友人の協力で遂に発見し、これが五郎次の墓であるとした。

神山の研究は五郎次の系譜、五郎次の墓については誤りが認められるものの、彼によって五郎次研究は大きく進

歩した。この点で神山の功績は大きい。以上のほか一九四〇年（昭和一五）には数編の論考があるが、従来の見解に付け加える新知見はない。

一九四二年（昭和一七）鈴木三郎は「日本種痘はじめ」[41]を出版した。五郎次については本書一九四頁中四分の一の五五頁にわたって記しているが、本文ならびに図は殆ど神山　茂の「初めて種痘を将来した五郎治」[39]を模倣したもので、新知見は一つもない。五郎次の肖像を示していることも誤りである。

翌一九四三年（昭和一八）は中川五郎次研究史上、注目すべき著書が函館の阿部龍夫[10]によって出版された。阿部の主宰する無風帯社から出された一三八頁の小著であった。五郎次が最初に種痘を行ったとされる一八二四年（文政七）から数えで一二〇年になり、「中川五郎治牛痘接種百二十年記念」として上梓された。本書は六章（実際には章とは書いていない）からなり、第一章「五郎治種痘の実証」では、五郎次が種痘を行ったことは小貫庸徳[7]、村尾元長[9]の論文によって実証されることを示した。特に官報[8]、村尾の論文の記載は小貫[7]の記事に村尾が追加調査し、大幅に改訂したことを明らかにした。

第二章「五郎治の事蹟」では、「御申上荒増」や「異境雑話」などによって五郎次の生涯を論じ、墓碑および系譜については前述した神山茂[39,40]の研究を全面的に採用している。第三章「五郎治傳来の種痘書」では、五郎次将来のロシア語の種痘書に関して市立函館図書館蔵の「遁花秘訣」の一写本、利光仙庵による安政二年版の「魯西亜牛痘全書」に言及紹介した。第四章の「五郎治の種痘」においては、最初の種痘は信拠すべき史料に拠れば一八二四年（文政七）まで遡ることが出来るものの、それ以前の種痘実施の有無については明確でないと慎重な態度を示した。

種痘の実際についても、熊坂秀斎の言、井上宗端の「魯西亜傳牛痘種法之記」、松本胤親の「五郎次話」を引用し論じているが、決定的史料が欠如しているため、痘苗の製造にしても、種痘の実際にしても確定的結論に到ってい

ない。第五章では五郎次の種痘法を後世に伝えた人物を論じている。五郎次に関する史料を残した人物として熊坂秀斎、井上宗端、松本胤親の三人を挙げ、日本における種痘法の鼻祖として功績を紹介したのは河野常吉、富士川游、関場不二彦の三氏を挙げている。第六章「五郎治種痘法後日譚」では、五郎次から種痘法を学んで実地に応用した白鳥雄蔵、桜井小膳、高木敬策などの事績を叙し、さらに秋田における白鳥雄蔵による種痘の普及、そして阿部の著書が出版されたと同じ年の二月に秋田の郷土史家吉成直太郎が「大麻刈根」のペンネームで秋田魁新報に「秋田藩文化史研究―種痘の咄」（上、下）と題して発表した論考を引用し、大館地方で種痘を行ったのは加藤蓼州が主張する田原貞庵、後改め大森誠達説を否定して、臼井貞庵であろうと述べている。[42] このように阿部の著書は当時入手できるすべての史料を小児科医としての立場から、冷静に評価批判して五郎次の業績を論じたもので、この意味で阿部龍夫の著書は中川五郎治研究において、現在でも高い評価を得ている。

なお阿部が著書の中で言及した大麻刈根、つまり吉成直太郎は新しく秋田藩士井上宗翰の記録と秋田藩士石井忠行の「伊豆園茶話」を発掘して白鳥雄蔵の秋田における種痘実施の状況を明らかにした。秋田種痘史、延いては中川五郎次による種痘法の研究に大きな貢献をしたといえよう。

以上昭和前期の研究を概説したが、一九四〇年（昭和一五）から一九四三年（昭和一八）にかけて中川五郎次研究は大きく進展したが、中でも阿部龍夫[10]と神山茂[39,40]の研究は特筆される。

## 5　昭和時代後期（一九四五年八月～一九八八年一二月）

戦後の混乱の中で中川五郎次研究は細々と始まったが、その先陣を切ったのは松前町の郷土史家松本　隆であった。彼は一九四八年（昭和二三）に「月刊叢書」（二）に「中川五郎次ノ事歴」[43]と題して論文を発表した。地元の研

究家だけに法源寺にある中川家の墓碑は五郎次の親の墓であるらしいとしたのは卓見であったが、五郎次の没年を安政三年、白鳥雄蔵の郷里を秋田、福山に住んでいたのは甥の栄吉であるなど重大な誤りも認められるので注意が必要である。一九五一年（昭和二六）阿部龍夫[14]は一九四四年（昭和一九）に函館読書会で行った講演をその著書に採録した。演題は「『中川五郎治と種痘伝来』余談」であるが、鈴木三郎がその著書「日本種痘はじめ」[1]に神山　茂の文章を殆どそのまま転載していることに義憤を感じて講演したものであった。

したがって五郎次自身についての新知見はないが、白鳥雄蔵については詳細な系譜が発表されている。一九五三年（昭和二八）吉成直太郎は「佐竹藩医薬史の研究（其の四）第三編種痘篇」[15]を記したが、これは吉成が一九四三年（昭和一八）に「大麻刈根」のペンネームで発表した論文を補訂したものであった。

一九五六年（昭和三一）五郎次研究で一つの重要な動きがあった。日本の種痘史に関心を持っていた東京大学医学図書館の司書中里竜瑛[16]は札幌での研究会への途中松前と函館に立ち寄り、法源寺で墓碑と過去帳を調査した。神山茂[39]の調査で五郎次夫妻の戒名とされ、墓碑にも刻まれている「大安心徹居士」、「徳室恵然信女」は過去帳に各々「文政五壬午年閏正月廿六日　小松前五郎治親ナリ」、「文政六癸未年七月晦日　小松前五郎治母」とあるのを見出したという。これによって神山　茂の調査で五郎次の墓碑とされてきた法源寺の中川家の墓は五郎次の両親の墓であることが明らかにされた。中里は市立函館図書館で偶然に阿部龍夫と神山　茂に会い、この問題について議論して三人は次のような結論に達した。「護国院」の院号を贈られた戒名「大安心徹居士」は五郎次の父親の戒名であること、五郎次の妻の戒名とされたのも同様に五郎次の母の戒名であること、したがって法源寺の墓碑は五郎次に両親の墓であること、函館の高龍寺の墓は五郎次の息子市三郎の墓であることであった。

右に述べた中里の指摘は正しいが、しかし本文において、五郎次の出身地を「河内村」（川内村が正）、生年を

「明和六年（五年が正）」、「福山で病死（病死かどうか不詳）」、「文政三年に遁花秘訣が校刊された（校刊されなかった）」など間違いもあるので注意が必要である。

従来五郎次の墓とされてきたのは、実は五郎次の両親の墓であったという中里の鋭い指摘を重く受け止めて、阿部龍夫は一九五七年（昭和三二）に著書「函館郷土手帳」の中で「中川五郎治の没年と墓と子孫」[47]と題する文章を発表した。

この中で阿部は神山、中里の論文を紹介しながら、改めて五郎次の墓がどこにあるのか、五郎次がどこで死亡したかについて検討を加えた。先ず松前町の郷土史研究者永田富智に連絡し、法源寺の過去帳を再調査した。折り返し永田からは過去帳に左の四名が披見されると返事があった。

文政五年壬正月廿六日
　大安心徹居士　小松前五郎治之親
文政六年七月晦日
　徳室恵然信女　小松前五郎治之母
安政三年五月五日
　輝叟常光禪男　山ノ上町　中川市三郎事
弘化五年九月廿七日
　義孝良仁信士　山ノ上町　中川市三郎事

これを報じた永田は「中川市三郎」が二人いるために解釈に苦慮して、結局「義孝良仁信士」が長男の市三郎で、「輝叟常光禪男」が五郎次であろうとした。文政五年没の「大安心徹居士」が父親、文政六年没の「徳室恵然信女」が母親であることは確定したが、今度は新たに二人の「中川市三郎」のどちらが五郎次で、どちらが市三郎であるかの問題が起きた。阿部は二代目栄吉の長女セイの夫馬場金蔵を介して室蘭に居住していた栄吉の長男重雄から過去帳の写しを得て検討した。

天真院輝叟常光居士　安政三年五月五日
智蓮院徳室恵然大姉　天保十四年六月九日
中川五郎治妻

義孝良仁信士　嘉永元年二月廿六日
護国院大安心徹居士　弘化五年九月廿日
中川五郎治

中川家の過去帳は俗名の記述も不十分であるため、阿部は中川家の人達から詳細な聞き取り調査を行った。そして中川家には一八四八年（弘化五）の「仏」が五郎次であるという伝承があったことを突き止めた。さらに馬場セイの祖母「よし」は市三郎の娘（初代栄吉は婿）になるが、一九三五年（昭和一〇）に数えの八四歳で死亡しているから、生まれたのは一八五二年（嘉永五）となる。そうすれば一八四八年（弘化五年、嘉永元）九月に没した人物は「よし」の父親つまり「市三郎」ではありえない。このような推察を行って阿部は次のような結論を出した。

1　松前の法源寺の墓碑に刻まれている戒名は五郎次の両親（養父母）の戒名である。
2　大正一三年に五郎次が従五位を追贈された際、中川家では誤って「大安心徹居士」を五郎次の戒名と考えた。
3　五郎次の没年は弘化五年（嘉永元）九月廿七日（あるいは廿六日）で、慣例によって両親の墓に葬られたと考えられる。
4　五郎次の息子市三郎は安政三年五月五日に没した。その戒名を刻んだ墓は後に初代栄吉によって函館の高龍寺へ移された。

以上の結果を基礎に阿部は五郎次の両親から六世の子孫重雄に至るまでの系図を示した。これで中川家の系譜がほぼ完全に解明されたと思われたが、しかしもう一つ大きな問題が未解決のまま残された。それは前述した阿部の結論の1に示したように五郎次が中川家に養子に入ったと考えられていたことであった。

この論文でもう一つ重要な指摘は、阿部自身採用した五郎治の肖像は、実は贈位の際、中川家で初代栄吉をモデルに描かせたものであることを明らかにした。つまり全くの他人をモデルに描いたのであるから、これを五郎次の肖像とすることは出来ない。多くの著書、解説書や論文でこの肖像を採用しているが、そのような論考は読むに価しない。

一九六三年（昭和三八）阿部は「[48]松前史談会報」に中川五郎次の顕彰碑の建立を訴えたが、何の反応もなかった。松本隆はこの会報に「我[49]が国で種痘の先鞭をつけた中川五郎治について―その埋葬地は松前城下である―」を発表した。松本はこれより一五年前に五郎次についての論[43]文を書いているが、阿[47]部、中[46]里などの論考に啓発されたのであった。松本は法源寺の過去帳を一層詳細に調査して阿部、中里らの研究で漏れた「歓山梅笑信士　慶応元年正月一六日　上野町　中川祐三郎二男　丑一六歳」と「智順貞意信女　安政六年七月六日　中川市三郎妻登？実母」を拾い出した。しかしこの二人の人物についてはその後どの研究者も全く言及しなかった。発表されたのが「松前史

談会報」という郷土史の雑誌だったため注目を集めなかったのであろう。松本は五郎次が両親の墓に埋葬されたと考えられるから五郎次自身の墓はないと主張したが、著者もこの考えを支持したい。

一九六三年（昭和三八）から順天堂大学医学部医史学教室の小川鼎三は「日本医事新報ジュニア版」に「日本の医学史から」を連載したが、一九六四年（昭和三九）一月号には「種痘の伝来」[50]を取り上げた。小川はその中で中川五郎次に触れ、彼が将来したロシア語の種痘書は翻訳されて「遁花秘訣」と題されたが、「惜しいことに、その書が今日に伝わっていない。」とした。これに対して当時医学生であった著者は「遁花秘訣」の一写本が市立函館図書館に所蔵されていることを指摘した。著者が指摘したことを小川は「日本の医学史から（一五）」[51]の中で明記している。このことが契機となって、後に述べるように小川の「遁花秘訣」の研究が始まるのである。

一九六五年（昭和四〇）五郎次研究で大きな進展が認められた。一つは順天堂大学の村山七郎[52]の研究で中川五郎次がシベリアから将来したと同種の書籍を日本で始めて紹介した。この年村山はレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）の科学アカデミー図書館で「遁花秘訣」の一八〇五年版（モスクワ版）を見出してマイクロフィルムを入手した。原題名をカタカナで記すと「スポソブ　イズバウィッツア　ソウェルシェンノ　オト　オスペンノイサラズイ　ポスレットウォム　フセオブシチェウォ　プリウィワニア　カロウィエイ　オスプイ」で、日本語では「牛痘の全般的接種により痘瘡感染を完全にまぬがれる方法」となる。馬場貞由は原題名の前半の「痘瘡を完全にまぬがれる方法」を「遁花秘訣」と巧に訳したことが知られる。

村山は「遁花秘訣」が日本で最初の牛痘法の文献であり、それが日本に将来された経路、馬場貞由によって翻訳された経緯、「遁花秘訣」の完全な日本語名称、馬場の使用した原書と一八〇五年刊行のモスクワ版との関係、「魯西亜牛痘全書」との関係について論じた。村山は論文の「追記」において原題名の日本語表記に関連して「遁花秘

訣」の函館本、「魯西亜牛痘全書」のいずれもが正しい記載でないことを指摘した。つまりいずれも馬場の草稿から乖離しているとした。さらに村山は「追々記」において一九六五年（昭和四〇）六月一八日モスクワのレーニン図書館でロシア語原書の一八〇三年版（ペテルブルグ版）を実見し、マイクロフィルムを入手したことを述べ、内容的に一八〇五年のモスクワ版と同一であるとした。

この村山の研究によって、それまで間接的にしか知られなかった「遁花秘訣」の全貌が姿を現したといっても過言ではない。ロシア語の原書のマイクロフィルムを入手した村山は早速これを日本語に翻訳して、翌一九六六年の順天堂医学雑誌[33,34]に発表した。五郎次研究、種痘史研究、日ロ文化交流史上大なる進歩であったといえよう。著者（松木）は一八〇五年のモスクワ版に限って言えば、一九六三年（昭和三八）に既に入手していたが、中川五郎次が将来したのは一八〇三年刊のペテルブルグ版であることから、その発表を控えていた。結果的に村山氏が先に詳細に研究して公表したことになる。

一九六五年（昭和四〇）著者は日本医事新報に「中川五郎治の種痘法」[35]と題する論文を発表した。北東北地方における中川の種痘法の普及について史料を探索中、秋田県立図書館でそれまで知られていなかった史料を発見し、それに基づいて五郎次の種痘について推察したものであった。五郎次の種痘法については、それまで第三者が断片的に語ったことしか知られていなかったので、著者が見出した「白鳥雄蔵種痘之書」は五郎次の直接の弟子である白鳥の伝えた史料であるが故に貴重である。白鳥の自筆でないことは史料の重要性を決して減ずるものでない。

一九六六年（昭和四一）、小川[36]は牛痘種痘法のわが国への伝来について簡潔に述べたが、そのなかで五郎次の事績を大きく取り上げている。前述したように村山七郎[33,34]は「遁花秘訣」の原書である一八〇三年年発行のペテルブルグ版を現代文に訳して発表した。この年、著者[37]（松木）によって以下に述べるように中川五郎次の系譜の研究上大き

な進歩が見られた。

神山、[39,40] 阿部[10]らの先行研究者は松前の法源寺に五郎次の両親の墓碑を見出したが、五郎次が南部領川内村の出身であることから、法源寺に葬られたのは五郎次の養父母であると断定した。常識的には当然のことである。しかし著者は五郎次が川内村の出身であることから、五郎次の実家の系譜について調査することが不可欠であると考えた。そして法源寺と同じ宗旨の泉龍寺の過去帳を調査した。五郎次が拉致された際、川内村検断から五郎次は小針屋佐助の倅である旨の通達があることを手掛かりに過去帳を検索すると、「文政五年閏正月二十六日　常山樹清信士　小針屋佐助也　松前ニ而死ス」、「文政六年七月晦日　曲会妙春信女　中町佐助内」とあるのを見出した。これは実の父母の法名と没年月日である。神山、阿部が調査報告した養父母の没年月日と全く同じである。戒名は別として実の父母の没年月日と養父母の没年月日が一日の違いもなく全く同じであることは通常考えられない。

したがって従来、神山、阿部らによって五郎次の養父母とされた人物は実の父母であることが確定された。異国送還民として他領に出国できなかった五郎次は両親の死後、松前の法源寺と故郷川内の泉龍寺の二ヶ所に墓碑を建立したのである。

しかも泉龍寺の過去帳に注記されているように、父親は五郎次を尋ねて松前に滞在中没した。そしてその一年後に母親も没した。相次いで両親を失った五郎次が松前で墓碑を建立し、さらに帰郷することが許されなかった川内村の泉龍寺にも祖父母と両親の戒名を刻んだ墓碑を建てたのはむしろ当然のことであったと思われる。いずれにせよ著者の泉龍寺の調査によって五郎次の系譜の研究が大きく進展したことは間違いない。

一九六七年（昭和四二）阿部龍夫は「中川五郎治の種痘法」[58]と題する論文を発表したが、これは著者が日本医事新報[35]に発表した同名の論文に触発されたものであった。新しい史料を提示していないが、「白鳥雄蔵種痘之書」に対

する意見を展開したが、五郎次が痘苗をいかに入手したかについては断定を避けている。

この年著者は中川五郎次の関連して七篇[59~65]の論考を発表した。中川家系譜と墓域に関して二篇、白鳥雄蔵の種痘法と塋域に関して二篇、中川五郎次関連史料の紹介一篇と五郎次についての総説一篇、ロシア種痘史一篇である。少なくてもこれらの論考によって従来ともすれば、無視されがちであったいわゆる北方系の種痘法が注目され出したことは間違いない。大館の開業医武茂信雄[66]は天保の末年に大館で種痘を行ったのは臼井貞庵であると「大館沿革史」を引用して述べているが、一次史料を示しておらず、その上臼井貞庵を大館の医者と誤っている。この問題の解決は一九七三年（昭和四九）の松橋の研究まで待たなければならない。

一九六八年（昭和四三）にも多くの論文が発表された。角館の吉成は「秋田におけるロシア伝来の種痘法」[67]と題する論文を執筆したが、白鳥雄蔵の伝えた種痘法の秋田における普及について論じた。吉成が二五年来主張したことの纏めとも言うべき論考である。しかし特別な新知見は提唱されていない。順天堂大学の小川鼎三[68]と酒井シヅは同じく順天堂大学の村山七郎が「遁花秘訣[53,54]」のロシア語原書を現代日本語に翻訳したことから、この村山訳と「遁花秘訣」の写本二種（函館本、長谷川本）、「魯西亜牛痘全書」を比較検討した。主として馬場の訳文の正確さを論じているが、些細な誤訳は認められるものの、ジェンナー種痘法についてのわが国最初の翻訳、しかもロシア語からの訳であることを考慮すれば、馬場の功績は非常に大なるものがあるとし、併せて「遁花秘訣」を「魯西亜牛痘全書」と改題上梓した利光仙庵の貢献も大きいとしている。適切な評価であろう。

この年著者は三篇の論文[69~71]を執筆したが、特筆すべきは川内町の泉龍寺で五郎次の祖父母と父母の戒名を刻んだ墓石を発見したことを伝えた論考であろう。過去帳の記述と全く一致しており、系譜研究上大きな進歩であった。

一九六九年（昭和四四）北海道庁総務部は北海道開拓の功労者を一般の人たちに分かり易く知らせることを目的

に「開拓の群像」[72]を出版した。その下巻に中川五郎次が紹介されている。五郎次が南部川内村の小針屋佐助の子供であるとしたのは、従来の啓蒙書に披見されない点であるが、残念ながら誤って五郎次の肖像を掲げている。繰り返して云うがこの肖像は全くのニセ物である。

一九七〇年（昭和四五）北海道大野町は「大野町史」を発行した。その中で「中川五郎治と郷土の牛」[73]の一項がある。五郎次が痘苗を造るため大野村に牛を求めたという口碑から、当時大野村にも牛がいただろうと推察しており、当時の牛の生存を示す確かな証拠を提示している訳ではない。しかし一八五六年（安政三）の「蝦夷実地検考録」には大野村に二二頭の牛がいたと記されているという。一方馬については一八〇七年（文化四）の記録では大野村に百頭の馬がいた。青森県むつ市の郷土史研究者鳴海健太郎は「日本における種痘の鼻祖中川五郎治」[74]を書いたが、信用出来ない。たとえば、五郎次がエトロフ島に渡った時期を「文化二年（一八〇五）」としているが、その証拠は存在しない。五郎次は松前の中川家の婿養子になったと記述しているが誤りである。さらに五郎次の肖像を掲げている。肖像を示しただけで、その論文の価値は半減するであろう。

一九七〇年（昭和四五）から翌七一年（昭和四六）にかけて著者は七篇の論考を発表したが[75~81]、その多くは「魯西亜牛痘全書」を初めとする「遁花秘訣」の写本の書誌学的研究であった。鹿児島大学の木崎良平[82,83]は五郎次に一年遅れてシベリアから帰国した安芸の久蔵について記述し、安井広[84]はその所有する「遁花秘訣」の一写本を紹介した。注目すべきは阿部龍夫が「種痘事始」[85]を一九七一年（昭和四六）に執筆したことである。著者（松木）が秋田県立図書館で発見した「白鳥雄蔵種痘之書」を実見して自分の見解を記した論文で、五郎次は人痘を大野村の牛に植えて痘苗を入手したという結論である。これは中川五郎次に関する阿部の最後の論文となった。作家の吉村昭の「日本医家伝」[86]が一本として講談社から上梓されたのもこの年であるが、この中に「中川五郎治」が収められている。吉村はどのような医家

を対象とすればよいか迷っていたが、順天堂大学医学部の小川鼎三の示唆で中川五郎次を選んだという。

一九七二年（昭和四七）小川鼎三[87]と酒井シヅは岩波書店の「日本思想体系」の「科学（下）」に函館本の「遁花秘訣」を活字化覆刻して、詳細な注をつけた。当時小川は披見される諸写本の中で「函館本」が馬場貞由の草稿に最も近似していると考えていたからであった。右の小川の推察は誤っていたが、しかし小川らの努力によってジェンナーの牛痘種痘法に関する本邦最初の翻訳、しかもロシア語原書からの馬場貞由による翻訳が広く紹介されたことは、馬場の業績のみならず、中川五郎次の事績の湮滅を防ぐ上で大きな役割を果たしたと思う。

この年著者は米国ミシガン大学へ留学したため、留学前に投稿した「遁花秘訣」の国会本についての論文[88]のみが発表された。なお杉本つとむ[89,90]は一九七一～二年（昭和四六～七）にかけて「遁花秘訣」の狩野本、国会本、神原本について報告しているが、新知見は何もない。また北海道庁総務部行政資料室は「北海道開拓功労者関係資料収録」[91]を発行したが、その下巻に「中川五郎治」が収められて、六三点の資料が文献として示されている。

一九七三年（昭和四八）大阪大学の藤野恒三郎は「種痘法の昔と今」[92,93]を「診療と保険」に連載したが、その（7）と（8）において中川五郎次を取り上げて論じている。結論的には天然痘の膿を牛に植えるのは不可能であるから、五郎次がこの方法を採用したとは考えられない。しかし本当のことは不明であるとしている。藤野は諸家の報告を引用して論じて、自ら新史料を発掘したわけでないため、説得力に欠けることは否めない。著者はミシガン大学の留学を終えて、中川五郎次の研究を再開し、「遁花秘訣」の写本についての三篇の論文を発表した。これらの論考によって、決して「函館本」が内容的に最上の写本ではないことを明らかにした。そしてこれら中川五郎次関係の論文一三篇を収載した著書「北海道の医史」[94]を津軽書房から出版した。この年もう一つ注目すべき研究が報告された。鷹巣町の開業医松橋栄信[95]は「永年記」を調査して、一八四四年（天保一五）九月二三日に臼井禎庵と佐藤立天が鷹

巣に立ち寄り、「お花」と「伝助」の二人に種痘し、二人とも善感した事実を報告した。一九六七年（昭和四二）に武茂[66]は大館における最初の種痘は「臼井禎庵」によるとしたが、一次史料を示さなかった。しかし松橋は鷹巣村の史料中に種痘の記事を見出した。著者（松木）が原文を確認したところ「臼井貞庵」となっており、臼井と佐藤は阿仁村から大館へ向かう途中で鷹巣村に立ち寄ったのであった。これによってこれまで明確ではなかった大館で種痘した医師は臼井貞庵である可能性は非常に高くなったといえよう。

一九七四年（昭和四九）青森県の新聞「東奥日報」の編集長楠美鉄二は東奥日報に連載した「あっぱれ五郎治」[96]を一本にまとめて発行した。著者が楠美に提供した「御申上荒増」を小説風に書き直したもので、新知見は何もないが、五郎次を一般の人々にも知らしめた点は評価できよう。

一九七五年（昭和五〇）吉村昭の五郎次を主人公にした小説「北天の星」の新聞連載が終わり、上、下二巻として講談社から出版された。鹿児島大学の木崎良平は長年日魯関係史を研究してきたが、「中川五郎治に関する文献」[97]を発表した。しかし文献は主として「通航一覧」中のものであり、医学史関係の文献は全く無視されている。「通航一覧」中の記事は既に著者（松木）を含めた諸研究者によって引用されている。[98]

一九七六年（昭和五一）民族学者の加藤九祚はこれまでとは全く異なった視点から中川五郎次を評価した。加藤は五郎次の「異境雑話」に注目し、五郎次がこの中でシベリア諸民族について大変貴重な見聞を残してくれたと評価した。例えばトナカイの飼養の起原に関連することで、トナカイへの乗り方（ツングース族は左から乗る）や鞍の掛け方の違い（ツングース族はトナカイの肩甲骨部に掛けた）などについて五郎次が細かく観察して記したことに注目した。そして加藤は将来信頼できる「異境雑話」の写本の発見とその覆刻が望まれるとした。加藤のこの期待は一九九六年（平成八）大阪市立大学の左近[123]が新しい写本を発見覆刻したことによって果たされた。[99]

一九七八年（昭和五三）花山[100]は「牛痘接種のはじめ」を日本医事新報に書いたが、全く信用の置けない切田未良から史料の提供を受け、それらを受け売りしているだけで、自ら一次史料を求めて歩いたわけでない。この手の論文が一般の人達の眼に止まり易く、結果的にあやふやな情報として、そして最終的には誤った情報として流布する。注意しなければならない。

一九七九年（昭和五四）作家の吉村昭は月刊誌「ダン」[101~103]に「北天の星」執筆時の取材ノートを連載した。史料の博捜と綿密な現地取材を行う吉村だけに、取材ノートは小説の単なるメモではない。ところが記述に重大な誤りが指摘される。この連載は一九八六年（昭和六一）に「万年筆の旅（作家ノートⅡ）」[11]として文庫本に収められたので、そこで一括して批判したい。この年水沢市の切田未良[104]は「過去帳を訪ねて」を著したが、その中に「種痘の父中川五郎治の戒名を探ねて」が収められている。自ら松前の法源寺に赴いて過去帳を調査したかのような書き方をしているが、著者や阿部龍夫[94]の著作から引用しただけの話である。彼女は岩手県を中心とする寺院の調査を行ったことは事実であろうが、そうとすれば松前での調査を行って、同所よりももっと近い川内町泉龍寺の調査をしなかったことは納得出来ない。

切田が松前の法源寺の実地調査をしなかったことは二〇〇三年（平成一五）改訂版を出版した際に示した法源寺の墓碑の寸法は全く誤りであり、その写真は著者[94]（松木）の著書からの無断転載であることで証明される。許せないことである。札幌の小竹英夫らは「北海道医師会史一九七九」[105]を上梓したが、第一章に「天然痘と中川五郎治」とする一節が記述されている。主として阿部龍夫[10]の著書に準拠して記載したが、その後の研究の成果を何も採り入れていないのは残念である。

毎日新聞の記者を務めた浦上五六は「愛に種痘医」を一九六二年（昭和三七）から「医学史研究」に連載を始め

た。しかし浦上は連載の完結をまたず、一九六八年（昭和四三）九月没した。天然痘根絶〇年に際して浦上の論考を一本に纏めようという機運が盛り上がり、一九八〇年（昭和五五）に「恒和選書」[106]の一冊として出版された。本書の六三～九七頁は「牛痘をもたらした中川五郎治」の章であるが、主として太平洋戦争前に書かれた原稿であるため、一九五〇年（昭和二五）以降の研究は殆ど言及されていない。

一九八一年（昭和五六）秋田の石田秀一は「秋田の医史」[107]を上梓し、その中で「中川五郎治と白鳥雄蔵」と題して詳細に論述した。しかし典拠とする史料は著者が発掘した「白鳥雄蔵種痘之書」や吉成直太郎の発掘した井口宗翰の記録、伊豆園茶話、阿部龍夫の著書のみであり、新しい史料を何も示していない。また解釈にしても従来の見解と異なる意見はなく、わずかに秋田種痘史を要約した点が評価されよう。

この年五郎次に関する貴重な史料が発掘された。七月に行われた札幌で行われた第八二回日本医史学会で新潟の蒲原宏[108]と藤井宣正は新潟県三島郡寺泊の庄屋で見出された絹布断簡について報告した。中川五郎次が一八二二年（文政五）五月二五日に中川清三衛に宛てた書簡の一部である。その内容は牛痘に感染した乳絞りの女は天然痘に感宣しないこと、牛痘種痘法の優れた利点を認めたロシア王が使者をロンドンに派遣してその伝授を乞うたこと、牝牛の膿を採ってガラス板に保存し、唾で解いて種痘すること、牛の膿がない時は人の膿を牛に植えて膿を採ること、男子は左手、女子は右手に種痘すること、種痘したら入浴は出来ないこと、種痘後八、九日に膿を採り次の種痘に利用することである。ここに記された記述は例えばロシア王が牛痘種痘法を求めて王自らではないが、使者をロンドンに派遣したことなど、これまで発掘された史料の記述と近似している点が多く、したがって史料としては信拠すべきものであろう。しかしこの断簡が五郎次自筆であるとは断定することは出来ず、宛名の「中川清三衛」についても、中川五郎次側の系図には全く披見されない人物である。将来さらなる究明が必要であるが、いずれにせよ

五郎次の種痘に関して新史料が発掘されたことは喜ばしいことである。

一九八二年（昭和五七）に吉村昭は「北天の星―中川五郎治の事跡」[109]を発表した。この年の一一月二三日に行われた順天堂大学医学部医史学研究室開講二〇周年を記念して行われた特別講演の速記録である。講演の翌月に掲載するため急いで原稿が準備された故に誤植が多く、また講演であるため内容は正確ではない。あら捜しとなるので誤りの指摘はしないが、吉村が書いた文章であるだけに惜しまれるし、引用には十分注意が必要である。一つだけ指摘しておく。「小原庸徳」、「小川庸徳」は「小貫庸徳」の誤りである。

一九八三年（昭和五八）著者は一八八五年（明治一八）の小貫庸徳の調査で報告された七名と関場不二彦の報告の二名以外に新たに二名の中川五郎次から種痘を受けた人物を見出した。これは一八八二年（明治一五）の菊地武文の論文を発掘して判明した。中川五郎次は何百人にも種痘を行ったと言われているが、実際の種痘を実証出来るのは現在のところわずか一一名にしか過ぎない。

一九八六年（昭和六一）吉村昭は「中川五郎治について―「北天の星」」を文春文庫「万年筆の旅（作家ノートⅡ）」[111]の一章として収めた。前述したように、この文章は主として北海道の読者を対象にした月刊誌「ダン」に一九七九年（昭和五四）から三回にわたって掲載されたものである。「文春文庫」に収載されたことによって読者層は北海道から全国に拡大された。

吉村は厳密な現地調査と丹念な史料探索で知られる。「北天の星」執筆時には著者も弘前市で吉村の取材を受けた。「北天の星」巻末の「覚書」に記されている通りである。この意味で吉村は並の医学史研究者以上である。そして「中川五郎治について―「北天の星」」はもちろん小説ではなく、歴とした論考であると考えてもおかしくない。しかしこの文章には看過出来ない重大な誤りが多く存在する。以下にそれを指摘する。

1　二四〇頁　八行目

「日本医史学会会長の小川鼎三先生」とあるが、当時小川先生は日本医史学会の理事長をされており「学会会長」ではない。医史学会の会長は一年毎に代わる。小川鼎三の理事長在任は一九六〇年（昭和三五）から一九八四年（昭和五九）までである。吉村が「クレアタ」に「日本医家伝」を執筆したのは小川の理事長在任中である。

2　二四三頁　二～三行目

「五郎治は明和五年（一七六八）南部藩領下北半島の川内村（青森県川内村）に生まれ、天明の飢饉で餓死者の絶えぬ故郷を両親とともにはなれ、北海道の松前に行き、豪商に雇われた。」と記している。

五郎次は両親と共に故郷を離れたことはない。一八〇七年（文化四）に五郎次がロシア船に拉致された後で留守家族への手当て支給の文書が川内村検断から出されていることでもこのことは立証される。

3　二四三頁　七行目

「樺太クシュタンコ」は「樺太クシュンコタン」の誤植であろう。

4　二四五頁　七行目

「五郎治は、主として松前、函館の二千人にも達する人に種痘を行った。」とあるが、五郎次が種痘を行った正確な人数は知られていない。吉村は二千人という数字をどのようにして算出したのであろうか。伝聞の数値を単に加算することは余りにも危険である。将来この数字が一人歩きするからである。

5　二四五頁　九行目

「小西庸徳」は「小貫庸徳」の誤植である。

6　二五六頁　九～一〇頁

五郎次による種痘の人数を「二千人」としているが、これについては前述した。

7　二五八頁　一〇行

「当時、箱館北方の大野村（大野町）では、馬、牛それぞれ百頭ほどが飼われていた。」とあるが、本稿の一九七〇年（昭和四五）の条で言及したように、大野村で馬が百頭ほど飼育されていた記録はあるものの、牛の飼育頭数についての信頼すべき史料は存在しない。したがって牛の飼育頭数については吉村の創作である。

8　二五九頁　一～二行目

「五郎治は、商人畑谷宇兵衛の子である九歳の男子に種痘し、」と記されている。

五郎次に種痘を受けた人名について最初に言及したのは、小貫庸徳で一八八五年（明治一八）の函館新聞には他の六人と共に「江良町ニハ平民畑谷宇兵衛（七十歳）（原文では「宇」が「畑」の上にあって誤植―著者注）」とあって「九歳の男子」の記載はどこにもない。したがってこの記述は吉村の創作ということになる。著者の推定であるが、阿部龍夫がもし一八八五年（明治一八）当時数えで七〇歳の畑谷宇兵衛が一八二四年（文政七）に種痘を受けたとすれば、宇兵衛は数えで「九歳」であったとする記述を誤解したのであろう。

9　二五九頁　一一～一三頁

「もしも五郎治が雄蔵に伝授すれば、たちまち種痘は全国にひろがり、日本の種痘伝来は長崎からでなく、松前になったはずである。が、五郎治は、雄蔵の乞いを拒絶したので、その種痘は松前、箱館に限定されてしまったのである。」

白鳥雄蔵は五郎次から種痘法の伝授を実際に受けているので、右の記述は誤りである。白鳥の種痘法は津軽にも伝播された。

10　二五九頁　一五行

「それを解く鍵が、当時の福井藩医笠原良策に宛てた雄蔵の手紙にある。」

吉村が笠原良策宛ての白鳥雄蔵の手紙としたのは、一九三八年（昭和一三）に中野操が[38]論文の中で紹介したものである。その書簡の冒頭には一九三八年（昭和一三）の条で全文引用したように「五郎治の事承り候は奥州（仙台と承り候へ共不慥）の書生白鳥雄蔵京師へ遊学中…」とある。これを読んだだけで、この書簡は雄蔵が認めたものでないことは明らかである。これも吉村が早とちりしたのであろう。

以上些かあら捜しした感があるが、吉村の文章は読者に対して大きな影響を及ぼすからこそ、誤りは誤りとして正さなければならないと思う。

一九八七年（昭和六二）添川正夫は「日本痘苗史序説」[12]を出版した。その中で中川五郎次の種痘法にも言及した。著者（松木）の論考を引用したが、結論として五郎次がいわゆる牛化人痘を用いたとは考えられないとした。五郎次の種痘法を考える上で必須な論考であるが、多くの研究者は参考にしていない。

以上昭和時代後期の五郎次研究を概説してきたが、昭和三十年代の阿部龍夫による中川家系譜の解明、昭和四十年代の村山七郎による「遁花秘訣」原書の研究、著者による「遁花秘訣」の書誌学的研究と五郎次の出身地川内町泉龍寺の調査による系譜の研究が特筆されるであろう。

参考文献と英文抄録は（下）の末尾に付する。